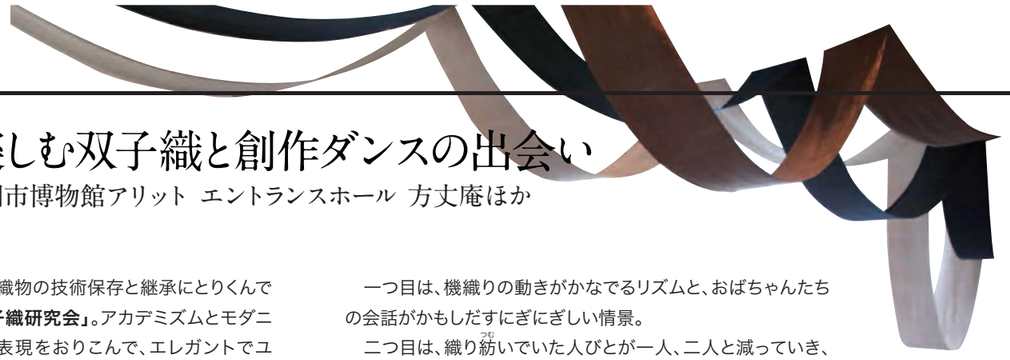

方丈庵で楽しむ双子織と創作ダンスの出会い

2014年10月4日 入間市博物館アリット エントランスホール 方丈庵ほか

地元入間で伝統織物の技術保存と継承にとりくんでいる**「野田双子織研究会」**。アカデミズムとモダニズムのダンス表現をおりこんで、エレガントでユニーク、そしてパワフルな動きをとりいれたダンス表現をおこなう**「ダンスユニット転々」**。人びとになごみとやすらぎ、いやしをあたえる**「入間市華道連盟」**。当日には、この三団体が三位一体となって手を結び、“きずな”を深めていくディスプレイやパフォーマンスが会場の入間市博物館で展開されました。天井から下がるディスプレイは、双子織研究会の会員が栽培した綿から糸をつむぎだし、色染めし、その糸で手塩にかけて織り出したさまざまな縞模様と色柄の反物であり、それが寄せては返す波のような表情をみせていました。生け花は“きずな”をイメージして心の糸と双子の糸を結び、またダンスは空間と人びととを結んでいくパフォーマンスをおこない、多くの来館者を感動と感激のステージへといざないました。 **工藤宏（SMF運営委員）**

「お喋りと双子織」創作ノートより

このパフォーマンスのお誘いを受け、“双子織”についていろいろお聞きしたときに、三つの情景が頭に浮かびました。

一つ目は、機織りの動きがかなでるリズムと、おばちゃんたちの会話がかもしだすにぎにぎしい情景。

二つ目は、織り紡（つむ）いでいた人びとが一人、二人と減っていき、寂しさや空しさを感じつつも、双子織への愛情や惰性ゆえに紡ぎ続ける人のいる情景。

三つ目は、私が見たいと願う情景。ふたたび人びとが集い、にぎにぎしいおしゃべりや機織りのリズムが広がり、小さな営みから大きな価値が花開いていく情景です。

これら三つの情景は、“双子織”という部分を別の物に変えれば私のストーリーにもなり、多くの人びとが経験するストーリーにもなるように思えました。

当日は、このような三つの情景から生まれた作品「おしゃべりと双子織」（振付：**藤井香**）と、やはり小さな営みのあたたかさを繊細に描いた「心の虹」（振付：**松元日奈子**）、方丈庵と双子織をビジュアル的にとらえ、独特な身体表現を目指した「Oオー」（振付：**桜井陽**）が上演され、さらに、2010年アリット初演の「鳥渡る光の川のはるかより」（振付：**椚川真理子**／俳句：**高橋博夫**／作曲：**笠松泰洋**）がロトンダ（円形のドーム）を行き来して上演され、自然界のスケールの大きさと美しさを感じさせるパフォーマンスで観客を魅了しました。（参加：70人） **藤井香（SMF運営委員）**

「ダンスユニット転々」のみなさんには毎回、思いもかけない場面を見せていただいています。「ほお、こう来るか」という、予想をうらぎられる快感。そして、どんな逆境でも踊れることがわかってくると、オリジナルの楽曲で踊ってほしい、地元の伝統囃子に合わせてほしい、双子織をテーマにしてほしい、とわたしたちの注文もエスカレートしていくのですが、それをたくみに料理して、どうだ、とつきつけられます。2008年に初めて入間市博物館アリットの庭で踊っていただいたのは、降りしきる雨の中でした。いろとりどりの風車（かざぐるま）が咲く芝生の上をどろんこでころげまわっていたのが印象にのこります。そしてまた、その後の催しでは仮設の茶室《方丈庵》にかけあがったり、建築家アレグザンダー設計の東野高校の回廊でかくれんぼをしたり……。その時、いつもの風景が一瞬、異空間になります。わたしたち観客は、自分の立ち位置にとまどいます。踊り手が突然、視界から消える。そして不思議なかっこうで、とんでもないところからあらわれてくる。きょろきょろ見まわす自分の身の置き所のなさ。その不安定な快感がたまらないのです。つぎはまた何を見せてくれるのか、見終わったとたんにあらたな期待がわいてきます。

山尾聖子（SMF運営委員）

糸のみち―染・織 リサーチプログラム

2014年9月6日 羽生市 ／ 10月5日 越生市

あなたとどこでもアート
小さな家プロジェクト

羽生アート散歩 藍染工場を訪ねて 9月6日

午前中に訪ねた**「野川染織」**では、社長の**野川雅敏さん**みずからが迎えてくださり、糸繰り場、藍だめ、織機工場などについてていねいに説明していただきました。なかでも石灰を入れたプールのなかで藍の酵母が発酵してくるようすを見て、藍が生物であることを実感しました。現在では天然酵母だての藍はめずらしいものだそうです。お昼には羽生市内で藍染工房を主宰している藍染作家**鈴木道夫さん**から、この地域で藍染が繁栄していた頃の歴史や現状についてのお話をうかがいました。印象的だったのは、「仕事場での熟練の職人さんの立居振舞はたいへん美しくむだがない」ということでした。それは、冷房も暖房もできず、糸の毛羽が飛び舞う過酷な労働環境での、毎日の作業によってつちかわれたものなのでしょう。

午後は、**「小島染織」**にうかがいました。経営統括室長の**清水豊さん**に、藍だめ工場や織機工場、天日干し場などについて説明をしていただきました。糸染めエリアでは、何回も藍液につけ、しぼりをくりかえすことで濃紺になっていくようすを見学しました。藍の染料は、空気にふれることで酸化して色づきます。同じ藍染でもひたす回数によって、淡い「あさぎ色」や深みのある「紺色」など、さまざまな色のちがいが生まれます。

今回訪れた藍染工場は、羽生市内に残っている4軒の会社のなかの2軒です。埼玉県東部でさかんだった藍染ですが、現在多くは廃業しています。しかしながら今回訪れた羽生市の藍染工場はとても元気で、藍染をささえる方がたの情熱をつよく感じました。最後は行田市の「牧禎舎」におじゃましての藍染体験です。みなさんの真剣な取り組み、すばらしい成果品。充実した一日でした。（参加：21人）

野川雅敏さん

清水豊さん

牧禎舎での藍染体験

越生アート散歩 裏絹の里を訪ねて 10月5日

台風も近づいた雨のなか、行きのバス内で講師の**荒牧澄多さん**から越生の歴史と町なみの概略をうかがった後に**登録有形文化財「金子家住宅」**へ。**金子和弘さん**からは越生における織物産業の歴史と現状を、また荒牧さんからは越生に残る伝統的建造物の特徴と、最近まで残されていた「越生織物会館」の歴史などについてお話がありました。また、かつて織物工場を営んでいた吉川さんからは越生の生絹（きぎぬ）の「裏絹」にかんするお話があり、越生がかつては和服産業を下支えしていたことをあらためて認識しました。そして、その後は今も残る**織物工場「島野工業」**へ。3年前まで稼働していた工場です。現在も機械に糸がかかっていましたが、そこにはまたチャンスがあれば再稼働したいというご主人の思いがあります。最後は、3階建ての蔵である**登録有形文化財「岡野家住宅」**へ。岡野さんの配慮により、3階まで拝見することができました。棟木には「大正四年四月拾六日」「長島文吉」とあり、施工者の名前もしるされています。通りに西面して建ち、桁行（けたゆき）3間・半梁間（はんはりま）3間半で、正面には奥行1間の下屋（したや）がついています。1階戸袋には亀甲崩（きっこうくず）しの文様が銅板で作られ、軒が出桁造（でけたづくり）で2階のみ垂木（たるきがた）形をあらわすなど、意匠性に富んだ造りです。なお、金子さんにはご家族でのお茶の接待などでたいへんお世話になりました。また後日、金子さんから「越生の特産品正絹胴裏地」を手に入れられたというご報告をいただきました。その裏絹は、かつて越生織物協同組合の理事長であった長島さんが問屋向けの商品として売ったものだそうです。長島さんは「長島商店」、あるいはお父さんの名前の「長島康延商店」として裏絹の仲買をしていました。（参加：26人）※長島康延商店は昭和38年から平成初年の1990年頃まで絹織物工場も営んでいました。 **草野律子（SMF協力委員）**

金子家住宅

金子和弘さん

岡野家住宅